はじめに　――「ふらっとスペース金剛」誕生前夜　4

第1章　自分たちの居場所が、女性の働く場に
――「ふらっとスペース金剛」の15年をふりかえって　……岡本　聡子　16

第2章　私たちはみんな落ちこぼれママだった　（聞き手／原井メイコ）

いい嫁、いい母でいようとがんばりすぎて
睡眠不足でノイローゼになりそうな日々でした　……巽　真理子さん　36

ジェンダーとは何か、支援とは何か……
「ふらっと」でいっぱいしゃべったことが今の基盤に　……三好さゆりさん　44

子どもが生まれたとたん、行く場所がなくなって
近所のスーパーをずっと徘徊してました　……西岾（にしさこ）　祥子さん　50

みんなが子育てママを支援したかったように
私も「ふらっと」を応援したいと思っていました　……福田　聖子さん　56

より広く知ってもらうために
「ふらっと」は、私が思い描いてた市民活動そのもの
失敗してもやってみよう！と言えるのが魅力です …… 小林　和子さん 62
ひとりひとりに寄り添うために …… 67
「自分の幸せを考えてもいいんじゃない？」と
言われて離婚を決意。自分探しが始まりました …… 奥田末利子さん 68
子どもを両脇に抱えて、マンションのベランダから
飛び降りようとした私が、子育て支援の原点 …… 岡本　聡子さん 74
第3章 女性たちの「活動」を「仕事」にするために
興味や関心も、年齢も、背景も違うメンバーをまとめるには…… 82
仲間で立ち上げた団体だから当然、衝突もある。そんな時は…… 84
個人の収入が減ってしまう決断はなかなか難しい…… 86

NPO活動って、無償ボランティアでやっていかなあかんの？……88
女性ばかりの集団だと大きな決断を避けてしまいがち……92
法人になる必要、あるの？　NPOじゃないと、ダメ？……96
女性ばかりの集団。仕事中もついつい、おしゃべりに夢中に……100
スタッフが増えてくると 意欲の差も目につくように……102
スタッフのほとんどが、子育て中。子育てしながらの勤務は大変……106
就職したい！という大学生が現れた。さあ、どうする……108
女性同士のギスギスが大きくなってしまうことも……110
子育てママたちの悩みも スタッフの悩みも聞いてほしい……112
これからもずっと続いていく組織にするために必要なことは……114

ふらっとスペース金剛15年のあゆみ……116
ふらっとスペース金剛の事業内容……118

おわりに　121

第1章

自分たちの居場所が、女性の働く場に

――「ふらっとスペース金剛」の15年をふりかえって

子育てママたちが集うひろばを……とスタートした、「ふらっとスペース金剛」。
開設から15年たった今、事業内容も多岐にわたるものとなり、組織のあり方も変わってきました。
その変遷を、15年間代表を務めてきた岡本聡子の視点から、駆け足でふりかえってみたいと思います。

自分たちの居場所が、女性の働く場に
――「ふらっとスペース金剛」の15年をふりかえって

ふらっとスペース金剛 初代代表 **岡本 聡子**

私がダメ母だからしんどいの？

誰ひとり知り合いのいない東京で、重いアトピーをもつ乳飲み子を抱えて孤軍奮闘していた私。仲間や居場所を切実に求めているのに、助けを求めることをためらい、周囲に心を開くことができなかった自らの子育て経験が、私の活動の原点です。

手は差し伸べられていたのかもしれません。でも、「こうすればいいのに」という助言は、私の心には届きませんでした。「あなたはがんばってきたんだね」「これからは一緒にがんばろう」と言われてはじめて、これまでの自分を受容されたという実感を持つことができ、自らの殻を破ることができたのです。

２００１年、東京から帰阪して生活が落ち着いてきた時、富田林市の公民館で企画されたジェンダーについて考える講座のタイトルに息をのみました。

「殻をやぶって街に出よう！」

その強いメッセージに触発され、私は子どもを託児に預けてその講座を受講することにしました。母親だからこうしなくちゃいけない、こうあるべき、という思い込みの殻を破って。

そしてそこで出会った女性たちが、年齢も経験もまったく違うのに、私と同じ悩みを持っていたことを知り、はっとしました。

ひょっとして、私がダメ母だったから子育てをしんどいと感じていたのではなく、女性全体が置かれている環境のせいではないか？

そんな疑問を抱えて受講した「女性問題アドバイザー養成講座」で、「ふらっと」を立ち上げるメンバーと出会うことになりました。

自分たちで居場所をつくろう

「ふらっと」の立ち上げメンバーの一人である原井さんに誘われて、現在の「ふらっとスペース金剛」の拠点である民家で会議をしたことが、エスコープ大阪のメンバーと出会うきっかけとなりました。

生協活動をしていたわけではない私は、「この場所の活用をどうする？」という話し合いに、お客さんのような気持ちで参加していました。しかし、「『〇〇ちゃんのお

母さん』だけでなく、私という存在を大切にしたい」「自分たちに必要なものは自分たちで実践していく」という先輩たちのエネルギーに圧倒され、主婦の寄り合いとは違う力強い雰囲気を心地よく感じました。また当時、社会福祉士国家試験の受験をするために、福祉の勉強をしていたことも私の気持ちを動かしました。

保育所、障害児施設、児童館など子どものための施設はあるけど、私が経験してきた母親の孤独に寄り添い、専業主婦の負担を減らし、悩みを打ち明ける場所ってない。居場所がない。

じゃあ、作りたい！

ぼんやり考えながら、何軒か不動産会社をまわりました。しかし、当時は住居目的以外に物件を貸すということがなかなか理解されず、事務所ですか？ 店舗をお探しですか？ サークル活動って不特定多数の人が出入りするんですか？ 等々、不信感をあらわにされるばかりでした。さらに、会社ですか？ とも聞かれ、物件を個人で契約するしか方法がない、ということも悩みの種でした。サークルやグループでは賃貸借契約も銀行口座も作れないことを、その時知りました。

主婦が社会で何かをしようと思っても、ハードルが高いんだなあ、と思っていたまさにその時、原井さんがひとこと。「ここが子育て支援の場になるなら、岡本ちゃん代表やらへん？ 岡本ちゃんのしたいこと、ここでやったらええやん」。

スイッチが入った私は「ふらっと気軽に立ち寄れる場づくり」「フラットな関係で、

お互い支え合う居場所づくり」の実現にむけて突き進むことになりました。２００３年５月のことです。

お金の問題！

拠点ができたとはいえ、５万円の家賃を払いながら、収入もほとんどない主婦たちでどう活動したらよいものか。10人のメンバーが、月に５千円を負担することで始めはしましたが、集金袋回収の目的が色濃くなった月一回の運営会議では、いつまで続けられるんだろうか、という不穏な空気に焦りを感じるようになりました。

「ふらっとスペース金剛」に収入がいる。

そこで、原井さんが富田林市から依頼を受け、サークル「あいあい」のメンバーに声をかけて実施していた託児の仕事を、「ふらっとスペース金剛」で一括して受けたいという申し出をしました。個人で受けていた仕事を、団体として受けるという提案です。個人だと時給７００円もらえていた仕事が、団体の維持のために時給５００円になるとはメンバーに説明できない、という原井さんとずいぶん議論をしました。託児メンバーとの意見交換会や説明会を経て、団体で受託することが決まりましたが、そこで再び、法人格がないことで、銀行口座が個人でしかつくれない、という現実にぶつかります。会計西畔（にしざこ）さんの個人名義の通帳からのスタートでした。

それでもお金が足りない。初年度は30ヵ所ほど助成金申請をしました。２万円規模から絵本の現物支給まで手あたり次第に応募しまくり、その年の12月、先導的コミュニティビジネスとして１００万円のファンドを受けることになりました。以後、家計簿のような規模を超え、予算やら、事業やらという意識へと変化していくことになりました。

そんな中、法人格がないと応募できないところが多いことに気がつきました。助成金を受けるだけでなく、外部から仕事を受けるにも「ＮＰＯ法人」になることが必要だと、立ち上げメンバーに提案しました。生協活動やワーカーズ運動をしてきた先輩たちは「サイズの合わない服を着ているみたい」と言いながらも新しい取り組みを応援してくれました。意見が合わなくても、議論をつくして実行していける仲間がいることに、とても勇気づけられたのを覚えています。

こうして２００４年８月、子育て支援サークルは、「ＮＰＯ法人ふらっとスペース金剛」となりました。

ついに「つどいの広場事業」を受託

現在では児童福祉事業となっている**「ほっとひろば（旧名称「ほっとスペース」）」**ですが、２００３年のスタート当初は、「主婦が集まってお茶のんで、子どもを遊ばせ

て結構なことですな。井戸端会議で旦那のグチを言うてることが子育て支援ですか」などの嫌味をよく言われました。特に年配の男性からは冷ややかにとらえられていたように思います。「子育てもできないわがままな母親の支援をしないといけないのか」とも言われました。

そんなころ、富田林市にも子育て支援課が誕生しました。厚生労働省が少子化対策の一貫として「つどいの広場事業実施要項」を定めたのは２００２年の４月ですが、その年に始まった「つどいの広場」は全国でわずか28ヵ所。市の事業担当課もまだ認識していない時期でした。

３歳未満の子どもと親が集う場をつくり、その交流を促進し、相談にのったり、子育て情報を提供したりする事業。まさに、私たちが開設している「ほっとスペース」のことだ！と胸が熱くなりました。「つどいの広場事業のことについて教えていただきたい」と、すぐさま厚生労働省に電話をかけました。「都道府県の方ですか？　市町村の方ですか？」と聞かれ、「大阪府であり、富田林市の方でもあり……」としどろもどろで、自らの名乗り方もわからなかったことを思い出します。幸いなことに、当時の少子化対策企画室長が電話に出てくださり、京都で研修会があることを教えてくださいました。「つどいの広場全国連絡協議会（ひろば全協／現在はＮＰＯ法人子育てひろば全国連絡協議会）」が開催するその宿泊研修に、三好さんと子連れで参加しました。研修会に同行した夫が、交流会の間、４人の子守を引き受けてくれました。

「親子の居場所――ひろば」を実践する全国の仲間と出会えたことで、ますますやる気が上がり、鼻息は荒くなりました。さっそく市役所の担当課に研修の報告に行き、ぜひ私たちの町にも「ひろば」をつくりたい、とお願いに行きました。その後も、「つどいの広場事業」の説明や、自主事業で運営している「ほっとスペース」に集う母親の声を届けに市役所の窓口に通いました。担当課長は、「岡本さんが窓口に来ると、僕の血圧が上がる」と嘆いていました。「市長とお茶でもどうですか」という富田林市の企画にも真っ先に応募し、5人のメンバーで子育て家庭の現状を聞いてもらいに行きました。

２００４年12月、「ひろば全協」の研修会で「ほっとスペース」の事例発表をしたあと、控室に戻ると携帯電話が鳴りました。「来年度から富田林市でもつどいの広場事業を開設します。受託にむけて準備をすすめてください」との朗報でした。飛び上がって喜ぶ、という文字通りの喜び方を仲間とともにした感動は今でも覚えています。

２００５年8月より、富田林市つどいの広場事業を受託。年間５００万円の事業費で、やっとパートに行くのと同等の時給を支払えると胸を撫でおろしました。同時にそれは、心折れそうな状況に粘り強く向き合い続ける幕開けでもありました。

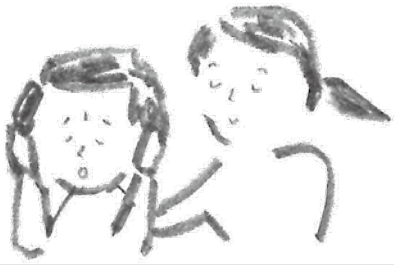
市の事業になった途端に、食事はダメだ、おやつもダメだ、出張はダメだ、市外からの利用者受け入れはダメだ、などと制限をしてくる担当課とは、なんども衝突をし

て議論してきました。活動の一つ一つには深い意図があることを根気強く説明し、意見共有の難しさにもめげてしまうことなく現在に至っています。別の言い方をすれば、富田林市の職員さんたちもずいぶん忍耐強いのだと思います。相手の立場や役所の事情を理解したうえで、自分たちの言い分を伝えたり提案したりする訓練をずいぶんとしていただきました。

収入のめどが立ってほっとしたのもつかの間、「家の近くにもこんな場所がほしい」という利用者さんの声をうけて、〈かがりの郷〉〈レインボーホール〉〈すばるホール〉、さらにはとなりの市町村までも**「出張ひろば」**と名づけて出かけて行くことになり、ますます忙しくなっていきました。

事業を始めるきっかけはいつも、日常の困りごと

一方で、猪突猛進な私が母親としてショックを受ける出来事が起こります。夏休み中、長時間留守番をさせていた小学生の娘が、宿題のプリント冊子の仕上がらなかった数ページを破りとってゴミ箱に捨てていたのを、夏休み最終日に発見したのです。わが子のほったらかし状態が招いたことだと猛反省。こんな時、みんなどうしているのだろう……と周囲を見渡してみると、学童保育に入れるほどの働き方をしていないから、普段は習い事に行かせたり、短時間の留守番ですませたりしているけど、長期



ふらっとスペース金剛の主な取り組み

子育てママを支援
・ほっとひろば（富田林市つどいの広場事業
・預かり保育
・出張保育
・一緒に子育てヘルパー
・児童の安全確認業務
・家庭的保育「Kotona」
地域づくりを応援する！
（子どもの居場所づくり事業）
・子どもわくわく体験隊
・子どもわくわく体験隊ジュニア
・夏休み寺子屋
・春休み寺子屋
・ふらっと文庫
I am OK
You are
We are
all OK

休暇になると困る、という人たちが意外と多いことがわかりました。私だけの悩みじゃなかったんだ！

翌２００７年の夏休みから、大阪大谷大学の学生の力を借り、リベンジのごとく**「夏休み寺子屋」**をはじめました。

このことは、子育てをしながら安心して働ける場を作る必要がある、ということを考え始めるきっかけになりました。「ほっとひろば」では、子ども連れでスタッフに入ることは日常的になっていましたが、「夏休み寺子屋」は子どもをほかのスタッフに任せて、みんなで働くという挑戦でもありました。

この年の秋から**「一緒に子育てヘルパー」**事業を開始しますが、これもひろばのとある利用者の悩みからスタートしました。２人目妊娠中に切迫早産で入院しないといけなくなり、保育所入所の手続きもしましたが、お父さんだけでこの事態を乗り切るのは難しい。朝は仕事前にお父さんが保育所に送り、お迎えは「ふらっと」からスタッフが行き、晩ご飯とお風呂を済ませてお父さんの帰宅に合わせて自宅に送りました。また、お母さんが急病で亡くなり父子家庭になった子どもの晩ご飯づくりに通ったこともありました。預かり保育だけではなく、それぞれの家庭のその時々の状況にあわせた支援の必要性が高まってきていたのです。困りごとは個々によって違いますが、子育てをしている中で、困りごとがない家庭はない。手伝いができる範囲で個別に対応する支援を事業にしよう！というのが「一緒に子育てヘルパー」事業開始の

きっかけでした。２０１８年現在では、養育支援家庭訪問事業として千早赤阪村、太子町、富田林市から委託を受け、育児ヘルパーの派遣もおこなっています。

女性が安心して働き続けられる場を

次のハードルは、社会保険加入を果たすことでした。

２００７年に私を含めて3名が社会保険に加入し、フルタイムで働く道を選択しました。学生ボランティアとして関わっていた一人の学生が「就職活動はしません。ふらっとスペース金剛で働きたいです」と申し出たのがきっかけでした。働く場をつくる、と言ってはきたものの、10万円にも満たない月収入で社会人1年生を雇うわけにはいかないと戸惑い、チャレンジ精神旺盛な私もさすがに躊躇しました。

そんな時、スタッフの奥田さんが家を出ることを決意し、子どもと生活していくためにフルタイムの仕事を探すという相談を受けました。女性のエンパワメント（人が本来持っている力を湧き出させること）を目指すと言いながら、自らを養うこともできないままの法人でいいはずがない。またまた私の背中をドンと押してくれる人たちのおかげで、お金の算段、理事への説得に力が沸き、一緒に壁を越えることができました。

事業所名称が『ふらっとスペース金剛』と書かれた番号1の健康保険被保険者証を

手にした時、社会人と認められたような感激がありました。何度も何度も眺めながら、奥田さんには「ふらっとスペース金剛」の年金受給者第1号になってほしいと切に願いました。

大きな事業をやりとげることでひとつになる

4ヵ所の「つどいの広場事業（現在は地域子育て支援拠点事業）」を運営し、落ち着くのかと思いきや、2010年、「ひろば全協」の理事に就任しました。「大阪つどいの広場ネットワーク」の代表も同時に引き受けたことで、外に出ていくことがますます多くなりました。留守を守る人がいてくれたから、実現したことだと、落着きのない私はとても感謝しています。一方で、私の目の届かないところでスタッフ間のもめごとやトラブルが起こるようになってきました。働き方の違いによる些細な食い違いや損得でいがみ合うのは馬鹿馬鹿しいのですが、そういうことは残念ながら組織内ではよく起こることでしょう。「ふらっと」も例外ではありませんでした。

そこで、「事業担当者」という名の責任者を置き、自分の仕事に自信と誇りをもてるような仕組みの実践を始めました。また、組織の中のことばかりではなく、外の世界にも目を向けるように促しました。そして、当時担当だった大阪府職員の中俊宏さんのやる気にもずいぶん助けられ、全国各地で開催されていた全国セミナーの大阪開

催に向けて動き出しました。

２０１１年、東日本大震災のあったその年の11月、実行委員長の私がストレスで声が出なくなるという失態の中、スタッフが一丸となってがんばったおかげで、「第10回子育てひろば実践交流セミナーinおおさか」は、８８８名の参加者を全国から迎えて開催することができました。自分たちの事業が全国で展開されていることに気づいてから、スタッフの意識がずいぶんと変化したように見受けられてうれしく思いました。率先して外部の研修にでかけるようにもなり、積極的に外の人たちと交流するようになっていきました。

自分たちのしてきたことを確かめたい

10年という節目の年を前にしたとき、私たちが実践してきた子育て支援は、母親にとってどんな効果があったのか、子育てしやすい社会のために成果をもたらしているのか、客観的な視点から振り返る必要を感じました。

２０１３年４月、大阪市立大学の社会人大学院に行くことを決めました。仕事をしながら夜に通うスタイルのため、２年間協力してほしいというわがままを許してくれた家族にもスタッフ仲間にも感謝しています。

修士論文「母親の育児不安解消における地域子育て支援拠点事業の効果―利用者ア

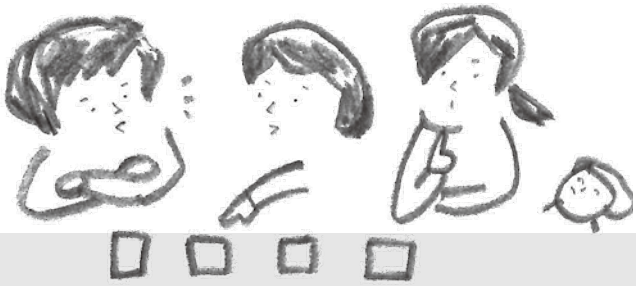
ンケートを通じた測定と検証―」では、私たちが取り組んできた事業が、仲間づくりや情報交換の場所として、高い効果を上げていることを確認できました。

一方で、育児の手助けや負担感の軽減には十分な効果をあげていなかったので、ヘルパー事業や一時預かり保育など、具体的な手助けの必要性がいっそうあることも見えてきました。また、漠然とした不安を抱えている母親に対しては、自分自身に自信を持てるような取り組みの必要性も浮き彫りになりました。

チャレンジと失敗を繰り返しながら

その間の「ふらっと」では、子育て中だからこそできることを発揮していこうと、商工会の助成を受けて、子育てママの商品開発事業にチャレンジしました。母親であり、生活者である視点を商品にとり入れていこうという試みでしたが、アイディアを商品にし、販売するということに関してあまりにも素人すぎたので継続を断念することになりました。この事業だけでなく、生まれては消えていく事業はいくつもありました。

せめて宿題だけでもきちんとやってほしい……と企画した「土曜日しゅくだい塾」は、子どもたちからの「なんでせっかくの土曜日に宿題しなあかんの」という不評で終了。大阪大谷大学の学生さんたちの力を借りて、「ふらっと寺子屋」を週に2回実



施していましたが、学習支援事業が制度化されたことを機に、私たち以外の担い手がいるならお任せしようと、これも終了しました。母親のエンパワメントを目的に、開設当初から続けてきた「子育て応援講座」ではファシリテーターとして峯さん、上村さんらが活躍してくれましたが、市の助成が終了して現在は休止中。ほかにも、山ほどの講座が企画され実施されてきましたが、現在開催しているのは「親子ふれあい体操」だけとなっています。

チャレンジの数も膨大ですが、失敗の数もめっぽうあります。失敗をおそれず何事にも挑戦して突き進む姿勢を教えてくれた先輩方が応援してくださったこと、根気強くつきあって実行してくれるスタッフたちがいたことが、数々の成功と失敗を支えてくれています。仕込み期間が長く、まだ実現していない事業もありますが気にしません。決してあきらめないで、機会が来るのを待つことが肝心。全速力で猛ダッシュが必要な時と、気長に気楽に温めておくことが大事な時があるのです。

現状にあった支援事業を

この15年間で、利用者の状況が変化したことのひとつに、育児休業から職場復帰していく母親が増えたことに加え、パートタイムも含め新たに就労する母親が増加したことがあげられます。

富田林市に待機児童はないというけれど、利用者さんとのやりとりから受ける印象はずいぶん違います。それが「家庭的保育」を考え始めるきっかけとなりました。一方で24時間休みなしの子育てに疲れ、働きに出たいという声もたくさん聞きます。また、子どもが集団生活になじめないかも、と不安がる声もあります。子育て支援の延長ととらえる保育事業があってもいいと考えるようになりました。

２０１８年４月に誕生した**家庭的保育事業「Kotona（ことな）」**の責任者となる奥田さんをはじめ、スタッフの川畑さんらは5年前から研修や見学をして準備をしてきました。なんとも仕込み期間の長い挑戦です。ＵＲ都市機構の店舗で実施するこの事業の準備には、「ふらっと」ならではの苦労話がありますが、それを書き出すと本がもう1冊できそうなので、ここではやめておきましょう。

さらに、児童虐待の相談件数の増加をうけ、大阪府が**児童の安全確認業務**の民間委託を２０１７年に始めたので、あまり深く心配することもなく手をあげました。とんでもない領域に手を出したように受け取られることもありますが、私たちが実践してきた子育て支援の延長上にあると考えています。関西大学の山縣文治先生がおっしゃっていた「ひろば事業はお招き型の子育て支援」にならって言えば、この業務は「お出かけ型の子育て支援」であって、関わり方こそ違うけれど、目の前の利用者に寄り添う姿勢は変わりません。「ひろばと全く違う」と実施する前には不安でいっぱいだったマネージャーの宮本さんは、今では「ふらっと」が安全確認業務をおこな

う意味は、「必要な子育て支援情報を届け、支援サービスにつなげること」と自信をもって話しています。

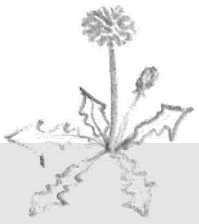
今後、家庭的な支援やお出かけ型の支援も広がっていくでしょう。そして、私たちの実践経験がその展開に役だっていくだろうと想像しています。

大事なことは変わらない

さて、代表理事としての私の次なる役割は、次世代にバトンをつなぎ、ずっとずっと続いていく「ふらっとスペース金剛の未来」に期待すること。私が先輩たちにしてもらったように、新たな「ふらっとスペース金剛」を見守り応援すること。

15年前に2ヵ月の赤ちゃんを連れて「ふらっと」を利用していた廣崎さんは高校受験の話題をする3人の母となり、理事として法人の運営を担っています。利用者時代を知る当時の厚生労働省少子化対策企画室長度山徹さんが、「貫禄ついたね」と驚く成長ぶりです。

すっかり古株の勝山さん、田中さんはこの春からは常勤職員として社会保険に加入します。自称「バーバーズ」の竹原さん、三木さんは、若いママたちのよき相談者として活躍してくれています。内田さんのように、利用者から親子ボランティア、そしてスタッフへとステップアップした人も多く、今ではスタッフの約半数が元利用者で



す。

２０１７年の恒例の忘年会で、子どもたちがワイワイと遊ぶ横で、大人たちがガヤガヤしゃべっている光景を久しぶりに眺めながら、15年前「ふらっとスペース金剛」を立ち上げた仲間たちの姿を重ね合わせました。そして「ふらっとスペース金剛」の原風景だと感じ、大丈夫だ！と心から思えました。

時代は変化していくけれど、大事なことは変わらない。私はわたしであっていい。あなたはあなたであっていい。私たちは考え方も、思いも、経験もなにひとつ同じことがないくらい違うけど、それでいい。自分を大事にするのと同じように、人を大切にすることをあきらめなければ、きっとそこは安心した居場所になると信じています。